

# 上司小剣『東京第一部愛欲篇』の制作状況

——信州大学所蔵石井鶴三関連資料から——

荒井 真理 亜（甲南女子大学）

## 一

上司小剣の『東京第一部愛欲篇』は、大正十年十二月二十五日に大鑑閣より刊行された。四六判、クロス装（クロスは東雲色、背クロスは白色）洋綴本、表紙に金箔押し、天金、角背、函入りである。発行所は大鑑閣（東京市京橋区桶町15番地）、代表者は面家荘侘、印刷所は牧口印刷所（東京市南鍛冶町5番地）、印刷者は牧口駒三郎。四三九頁。定価は三円二十銭。

この本の挿絵と装幀を手がけたのは、「東京」第一部〈愛欲篇〉（『東京朝日新聞』大正10年2月20日～同年7月9日）の挿絵も担当した、石井鶴三である。

『東京第一部愛欲篇』について、紅野敏郎は「上司小剣の『東京』と石井鶴三の挿絵」（『石井鶴三全集第二巻』昭和61年7月18日発行、形象社）の中で、次のように述べている。

単行本の画、表紙のカット——それも四角の枠の中に東京という字を入れ、周りは家また家の連なり、その向うに煙りをさかんに出している煙突が立ち並んでいる。大都会の平凡な構図ともいえるが、それが光と彩を伴ない、的確に描かれているために、一度手にしたら忘れ難い本ということになる。

表紙のカットには、後方に工場の煙突が林立し、その前方に家が建ち並んでいるだけでなく、手前の通りに人や馬、自転車なども描かれている。確かに描かれているものは「大都会の平凡」を思わせるが、小さなカットにそれらが遠近法を使って表現されており、線画ながら東京の奥行きが感じられる。さらに『東京第一部愛欲篇』では、それが東雲色のクロスに金箔で押されているので、朝方または夕方の陽を浴びて輝く東京の街の様子に見えなくもない。

扉絵には裸体の男女が描かれている。男女は同じ方向を向いており、男性が後ろから女性の手をつかんで引き寄せている。男性と女性の視線は交わっていないし、二人は同じ方向を向いても視線の先が異なっているように見える。扉絵は「東京」第一部〈愛欲篇〉の男女の有り様を表現している。

表紙のカットや扉絵の他にも、『東京第一部愛欲篇』には、挿絵が九点ある。挿絵は、各章に一点ずつ挿入されている。その内訳は、新聞に掲載された挿絵「日比谷の夕（9）」（大正10年2月28日掲載）、「向島の朝（2）」（大正10年3月3日掲載）、「濱町の家（2）」（大正10年3月16日掲載）、「三縁山の泣姫（6）」（大正10年4月7日掲載）、「愛宕山（6）」（大正10年4月25日掲載）、「花の上野（1）」（大正10

年5月8日掲載)、「若葉の清水谷(2)」(大正10年5月21日掲載)の七点と、単行本のために新たに描かれた挿絵「ホテルにて」「郊外の病院」の二点である。

石井鶴三は彫刻家、洋画家、版画家であり、挿絵画家としても活躍した。しかし、『東京第一部愛欲篇』の意匠から、石井鶴三が優れた装幀家でもあったことがわかる。

信州大学所蔵石井鶴三関連資料には、『東京第一部愛欲篇』の挿絵と装幀に関する石井鶴三宛上司小剣書簡が十一通ある。本稿ではこれらの書簡を紹介しながら、『東京第一部愛欲篇』制作の行程を追う。

## 二

「東京」第一部〈愛欲篇〉の新聞連載を終えた上司小剣は、単行本『東京第一部愛欲篇』を刊行するにあたり、その挿絵と装幀を石井鶴三に依頼した。その時の葉書が、①大正十年七月八日付石井鶴三宛上司小剣書簡である。

①石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「高1-217」)

七月八日

ながく挿画を有りがたく存じました。厚く御礼申し上げます。

偕『東京』四部作釘装のお

願ひ且つ御相談にお伺ひしたので

すが、いつ参上すればお目にかゝれます

うか。小生の方は十二日、或は十四日がよろしいのですが、両日のうちに御指定下されば大雨でない限り参上いたします。御面倒恐れ入りますが、お返事を下さいますようお願いいたします。

葉書の宛先は「府下。板橋中丸二六六／石井鶴三様」と記され、差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣(印)」とある。本文および宛先はペン書きである。本文には「七月八日」としか記されていないが、消印は地名が判読できないものの「□□／10・7・8／后6-8」とあるから、大正十年七月八日に書かれたものである。

上司小剣は「東京朝日新聞」に連載した「東京」第一部〈愛欲篇〉の挿絵の礼を述べている。そして、『東京』四部作の装幀の依頼と相談のため、石井鶴三に面会を求めている。

しかし、上司小剣が石井鶴三に『東京』四部作の挿絵と装幀を依頼した時点では、『東京』四部作を任せる出版社が決まっていなかった。上司小剣は②大正十年七月三十一日付石井鶴三宛上司小剣書簡で、次のように記している。

②石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「高1-216」)

七月三十一日

昨夜は「途ミセケチ」電車内で失礼いたしました。帰ったら、玄文社から最後の返事が来て居りました。何か埋め合せをして

もらつて、『東京』はあきらめるとい

ふことでした。大分大鑑閣になるだらう

と思ひます。いづれ「又 左傍挿入」参上いたしますが、何分よろしく。

玄文社も三井氏が出版部を罷め、長谷川巳之吉と「いふ人になりました。左傍挿入」

葉書の宛先は「市外板橋町字中丸二六六／石井鶴三様」と記され、差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣（印）」とある。本文および宛先はペン書きである。本文には「七月三十一日」としか記されていない。また、消印は「□□／□・7・31／前9―10」とあるものの、地名と年が判読できない。しかし、内容が『東京』四部作を刊行する出版社の選定に関するものであることから、この葉書は『東京 第一部 愛欲篇』が出版される半年ほど前、すなわち大正十年七月三十一日に書かれたものと断定してよい。

文面から、『東京』四部作の版元として少なくとも玄文社と大鏡閣の二社が名乗りを上げていたことがわかる。

玄文社は東京の化粧品メーカー・伊東胡蝶園が大正五年に設立した出版社である。大正九年二月三十日<sup>1)</sup>に、上司小剣は玄文社から『花道』を刊行した。そのこともあって、玄文社は『東京』四部作の出版も自社で引き受けたいと考えたのではないか。

『花道』の挿絵と装幀も石井鶴三が担当した。しかし、石井鶴三と玄文社との間で仕事の進行をめぐってトラブルが生じ、上司小剣も間に立って心を砕いた<sup>2)</sup>。上司小剣としては、『花道』刊行の際に石井鶴三にかけた迷惑を考えると、玄文社には『東京』四部作の出版を頼みにくい状況にあったのだろう。玄文社に対しては、難色を示したのだと思われる。②の書簡には「玄文社から最後の返事が来て居りました。何か埋め合せをしてもらつて、『東京』はあきらめるとい

ふことでした」とある。

さらに「玄文社も三井氏が出版部を罷め、長谷川巳之吉といふ人になりました」と報告している。「三井氏」とは、玄文社の出版部にいた三井玉輝で、『花道』の発行を担当した。その三井が玄文社の出版部を辞め、その後任が「長谷川巳之吉」（長谷川巳之吉）だという。長谷川巳之吉（一八九三―一九七三）は、銀行員などを経て、大正五年に太陽通信社に入社、雑誌「黒潮」を編集した。大正七年、玄文社で販売部長をしていた小倉武郎に誘われて、玄文社に入社した。「新家庭」（大正五年三月〜同十二年九月）や「新演芸」（大正五年三月〜十四年四月）、「詩聖」（大正十年十月〜十二年九月）「劇と評論〈第一次〉」（大正十一年六月〜十二年九月）などの編集に携わり、出版部長を務めた。大正八年五月から長谷川巳之吉に代わり、三井玉輝がその任に就いたが、上司小剣の証言から、大正十年に三井玉輝が出版部を辞め、長谷川巳之吉が復任したらしい<sup>3)</sup>。

話を元に戻すと、結局『東京』四部作は大鏡閣から刊行されることになった。それを知らせたのが、③大正十年八月六日付石井鶴三宛上司小剣書簡である。

③石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「高1―215」）

『東京』はいよく、大鏡閣と

決定いたしました。「去る十日頃に出版契約書を取り交はすことになりました。左傍挿入」おたのみしてありました通りで、釘装並に挿画の御進行をお願いいたします。背

皮は丸い方がよいかも知れんと大鏡

閣支配人の話でした。両極に通じるやうに御考案を願ひます。

奥様によろしく。八月六日。

葉書の宛先は「府下。板橋町中丸二六六／石井鶴三様」と記され、差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣」(印)とある。本文および宛先はペン書きである。本文には「八月六日」としか記されていないが、消印は「白金／10・8・6／前9―10」とあるから、大正十年八月六日に書かれたものである。

『東京』四部作の出版を引き受けた大鑑閣は、大正八年六月から十二年九月まで、雑誌「解放」を発行したことで知られる。東京市神田区錦町三丁目五番地(大正七年に株式会社となつて、東京市京橋区桶町十五番地に移転したようである)、大阪市南区三休橋南詰の二か所に会社を構えていた。社長は久世勇三<sup>5</sup>で、面家莊侘<sup>6</sup>が支配人だった。③の書簡に出てくる「大鑑閣支配人」は、面家莊侘である。面家莊侘は「背皮は丸い方がよいかも知れん」と提案しようだが、出来上がった『東京第一部愛欲篇』は角背である。

③の書簡には「おたのみしてありました通りで、釘装並に挿画の御進行をお願いいたします」とある。上司小剣は、①大正十年七月八日付石井鶴三宛上司小剣書簡に、『東京』四部作の装幀の依頼と相談のため、石井鶴三を訪ねたいと記していた。さらに「小生の方は十二日、或は十四日がよろしいのですが、両日のうちに御指定下されば大雨でない限り参上いたします」と言っていたので、石井鶴三との会見は大正十年八月十二日または十四日に行なわれた可能性が高い。その際、挿絵や装幀についても具体的に検討されたものと思われる。

### 三

出版社も決まり、いよいよ『東京第一部愛欲篇』の本作りが始まる。石井鶴三宛上司小剣書簡からは、その作業の様子が窺える。

④石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「高1―31」)

拝呈

先夜は失礼いたしました

わざわざ御足来

下さいます、何ん

の風情もなく失

礼いたしました

倅『東京』も初

めの方がいよく、

校了になりま

して、工場の方

であけて待つて居

りますから、何卒

日比谷の絵と

浜町の絵とを

おそれ入りますが大

至急にお願ひ

たしたいと存じ

ますお忙しいと

ころを御催促  
申してなんとも  
済みません何卒  
よろしく、なほ  
口絵も印刷に  
かゝりますから  
成るべく、お早くお  
願ひいたしたい  
と存じます。

敬具

九月十三日

上司生

石井様

侍史

封筒表の宛先は「板橋。中丸二六六／石井鶴三様」と記されている。封筒裏の差出人は「東京府下下目黒四一二／上司小剣／大正<sup>アキ</sup>年十月二日」とある。封筒裏は日付の数字のみペン書きで、その他は封筒に印刷されている。切手や消印はないが、封筒裏の日付からこの封筒は「十月二日」に用意されたものである。封書の中身は巻紙で毛筆である。ところが、本文の日付は「九月十三日」となっている。封筒と本文の日付が大幅にずれていることから、(仮番号・高1-31)の封書は中身の入れ違いの可能性がある。封筒が用いられた年はわからない。一方、巻紙では、上司小剣が『東京』も初めの方がいよく「校了」になったと知らせている。続けて「何卒日比谷の絵と浜町の絵とをおそれ入りますが大至急にお願ひいたしたい

と存じます」とある。この「日比谷の絵」と「浜町の絵」はいずれも「東京」第一部〈愛欲篇〉の場面であるから、④の書簡で話題になっているのは、『東京 第一部 愛欲篇』だと思われる。よって、巻紙は大正十年九月十三日に書かれたものと推定するのである。

文面から「九月十三日」の「先夜」、すなわち大正十年九月十二日に石井鶴三が上司小剣のもとを訪れたことがわかる。用向きは記していないが、それでも『東京 第一部 愛欲篇』の挿絵や装幀が話題に上ったに違いない。

また、④の書簡では、『東京』も初めの方がいよく「校了」になったので、「初めの方」の挿絵と口絵を「大至急に」用意してくれるよう頼んでいる。『東京 第一部 愛欲篇』は、本文全体の校正が済み、すべての原稿が揃った上で、印刷所に回されたのではないようだ。本文の校正が済んだ箇所から印刷に取りかかるといふ方法がとられたのであろう。したがって、入稿のスケジュールは上司小剣の校正作業の進み具合によった。④の書簡から、石井鶴三には、本文の校正作業に合わせて、挿絵や装幀を準備することが求められたようである。

⑤石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「高1-214」)

十月十四日

暫らく御無沙汰いたしました。

「先日一度葉がき出しましたが、板橋を淀橋と 行間挿入」

『東京』の校正が、半分ほど

「<sup>ママ</sup>したため戻つてまゐりました。 行間挿入」

すみましたが、表紙と画とは

お願いが出来ましたでせうか。

大鑑閣へ聞き合はしても、あす

こは会社でごたく／＼してゐてよ

く分りませんので一寸お伺ひ申上げます。

葉書の宛先は「府下。板橋。中丸二六六／石井鶴三様」と赤鉛筆

で記され、差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣（印）」とある。

本文には「十月十四日」としか記されていない。消印は地名と時間

が判読できないものの「□□／10・10・14／□□―5」とあるから、

この葉書は大正十年十月十四日に書かれたものである。本文は赤鉛

筆書きだが、行間の挿入文は黒インクのペンで書かれている。

文面から、大正十年十月十四日には『東京第一部愛欲篇』の本

文の校正が「半分ほど」済んでいたらしい。さらに、「表紙と画」の

進捗状況を尋ねている。その理由を上司小剣は「大鑑閣へ聞き合は

しても、あすこは会社でごたく／＼してゐてよく分りませんので」と

説明している。

石井鶴三もまた、出版社から連絡がないので困っていたらしく、

上司小剣に葉書を出したようである。それに対する上司小剣の返信

が、⑥石井鶴三宛上司小剣書簡だと思われる。

⑥石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号・高1―235）

十月三十日

お葉がき有り難く、寸法はお「示し 右傍挿入」不明二字 ミセケ

チ」の

「校正が漸く終りました 行間挿入」

通りと存じます。「不明一字 ミセケチ」何分よろしくお願いいたします。大鑑閣からも直接お

願ひいたすやう申しておいたのですけれ

ど、株式会社で「不明二字 ミセケチ」すから、係りの人が

多くて、「却つて 左傍挿入」手落ちがあつたのかも知れません。な

ほ今日支配人の面家おもやといふ人に手紙を出し

ま「不明一字 ミセケチ」

した。

葉書の宛先は「府下。板橋町中丸二六六／石井鶴三様」と記され、

差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣（印）」とある。本文およ

び宛先はペン書きであるが、行間の挿入文は赤鉛筆で書かれている。

消印は判読不能で、本文には「十月三十日」としか記されていない。

「お葉がき有り難く、寸法はお示しの通りと存じます」というので、

石井鶴三が上司小剣に「寸法」を知らせたようである。その後に「大

鑑閣からも直接お願ひいたすやう申しておいたのですけれど」とあ

るから、この「寸法」とは、『東京第一部愛欲篇』の「寸法」であ

ろう。したがって、⑥の書簡は、大正十年十月三十日に書かれたも

のと推定する。

上司小剣は、大鑑閣の不手際を「株式会社ですから、係りの人が

多くて、却つて手落ちがあつたのかも知れません」と述べている。先

にも述べたとおり、大鑑閣は東京と大阪の二か所に会社を置いてい

た。詳細はわからないが、当時は社長と支配人で会社を切り回して

いたようである。既に、雑誌「解放」は解放社が発行し、解放社の

事務所も大鑑閣から分離していたが、大鑑閣は歴史や地理、経済、

文化、教育、思想などの専門書から一般書まで多様な出版物を次々

に刊行していた<sup>8)</sup>。そのため、複数の社員を抱えていたのであろう。また、この時期、大鑑閣から出版された本の奥付を確認すると、発行人が社長の久世勇三となっている場合もあれば、支配人の面家莊佶の場合もある。大鑑閣では社長と支配人がそれぞれの人脈で仕事を請け負っていたようである。そのため、⑤の書簡で上司小剣が「会社でごたくしてゐて」「聞き合はしても」「よく分りません」と愚痴っていたような事態を招いたのではないかと想像する。

大鑑閣から石井鶴三に連絡がないのを知って、上司小剣は「支配人の面家」に手紙を出したのであろう。上司小剣は自著のために、石井鶴三と大鑑閣の仲介もしなければならなかったのである。

⑥の書簡の挿入文から、大正十年十月三十日には『東京第一部 愛欲篇』の本文の校正は終了していたことがわかる。いよいよ本作りは印刷、製本に進むわけだが、その作業が円滑に進むよう、上司小剣は気を配っている。

⑦石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号・高1—213）

十一月二日

昨夜はお邪魔いたしました。何分よろしく願ひます。挿画は日比谷の夕、濱町の朝といふやうに、画の中へ字を書き込んで下さると印刷する時及製本の折りにも便利と存じますがいかがでせう。

それから函（図）の意匠も表紙と配分の

よいのを、簡単な印刷で

出来るやうお考へを願ひます。

奥様に

よろしく。

葉書の宛先は「府下。板橋町中丸二六六／石井鶴三様」と記され、差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣（印）」とある。本文および宛先はペン書きである。本文には「十一月二日」としか記されていないが、消印は「白金／10・11・3／后0—1」とあるから、大正十年十一月二日に書かれたものである。

「昨夜はお邪魔いたしました」というので、上司小剣はこの葉書を書く前日、すなわち大正十年十一月一日の夜、石井鶴三宅を訪問したようである。

⑦の書簡で、上司小剣は、印刷や製本の際にわかりやすいよう、挿絵に小見出しを入れることを提案した。石井鶴三は上司小剣の意向に従った。『東京第一部 愛欲篇』の挿絵には、署名の上に小見出しが記されている。

先に挙げた④の書簡で、上司小剣は石井鶴三に「何卒日比谷の絵と浜町の絵とおそれ入りますが大至急にお願ひいたしたいと存じます」と催促していた。しかし、⑦の書簡には「挿画は日比谷の夕、濱町の朝といふやうに、画の中へ字を書き込んで下さると印刷する時及製本の折りにも便利と存じます」とある。つまり、挿絵は本文の校正が終了してから用意され、本文とは別に印刷所に渡されたものと考えられる。

また、⑦の書簡で上司小剣は、石井鶴三に函の意匠も頼んでいる。出来上がった函は、中身の本に比べると、単色刷りであったって簡素である。しかし、函の表には本の表紙と同じカットが印刷されており、石井鶴三は「表紙と配分のよいのを」という上司小剣の注文に

応えている。しかも、「簡単な印刷で出来るやう」という条件で、可能な限りの工夫を凝らしたのである。

⑧石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号・高1—212）

「一、如何なる場合に於ても人間が人間を殺すといふことを憎みます。それが兇行の ミセケチ」

十一月八日

何分よろしくお願ひいたします。

雨は池袋のステーションへ着いてから降りました。丁度よろしくございました。

大鏡閣の人がまゐりました。画の入れ場所（小みだしの境目へ挟むこと）を間ちがへ「ないやうに、御注意下さるやう／お願ひ致します。 右傍挿入」

葉書の宛先は「府下。板橋中丸二六六／石井鶴三様」と記され、差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣」（印）とある。本文および宛先はペン書きである。本文には「十一月八日」としか記されていないが、消印は地名が判読できないものの「□□／10・11・8／前9—10」とあるから、大正十年十一月八日に書かれたものである。

上司小剣は、書簡⑧でも石井鶴三に「画の入れ場所（小みだしの境目へ挟むこと）を間ちがへないやうに」と注意を促している。上司小剣がこれほどまでに挿絵の場所を気にするには理由がある。

上司小剣は、大正十年一月十三日付の石井鶴三に宛てた賀状（仮番号・高1—26）の中で、「目下『花道』の校正に忙殺されて居り

ます。二ヶ所の印刷屋でやつて早く出さうとしてゐるのですから、校正が大変です。小さくかいていたゞいた画の入れ場所がめちや／＼で困つて居ります（玄文社の方で入れちがへたのです）」と述べている。挿絵の挿入を出版社に任せたいで、『花道』の挿絵の多くが本文の場面と一致しない箇所に入れられてしまったのである。

このような失敗から、『東京第一部愛欲篇』の時には、挿絵を入れる場所の確認を石井鶴三に頼んだのであろう。

⑨石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号・高1—211）

装禎及挿画ありがたく。

御来訪下さいましたさうですが、旅行中で失礼致しました。新年ものゝ仕事忙しいので、此処へ転地いたして居ります。先は御礼まで。

府下。大森、森ヶ崎

十一月二十日 大金方

上司生

葉書の宛先は「東京。板橋町中丸二六六／石井鶴三様」と記されている。差出人は、葉書の裏に「府下。大森、森ヶ崎／大金方／上司生」とある。本文および宛先はペン書きである。本文には「十一月二十日」としか記されていないが、消印は「白金／10・11・21／前9—10」とあるから、大正十年十一月二十日に書かれたものである。

冒頭に「装禎及挿画ありがたく」とあるので、大正十年十一月二

十日には『東京 第一部 愛欲篇』の挿絵と装幀がすべて調ったのではないだろうか。

文面から上司小剣の留守中に、石井鶴三が上司小剣を訪ねたことがわかる。上司小剣がいつから森ヶ崎（現・東京都大田区大森南）に滞在していたのかはわからない。ただ⑧の書簡によると、大正十年十一月八日には自宅にいたようだから、森ヶ崎に行ったのは、それ以降であることは間違いない。「大金」は上司小剣が森ヶ崎に行ったときの定宿であった。上司小剣は、そこで「新年ものゝ仕事」をしているという。「新年もの」とは、大正十一年一月に発表された「白色の恐怖」（「解放」）、「かくし鬚」（「太陽」）、「寅号金庫」（「中央公論」）、「関ヶ原軍記」（「新演芸」）、「選後に」（「小説倶楽部」）、「当来の文芸」（「文芸旬報」）、「月評是非の問題に就いて（アンケート）」人次第である」（「新潮」）、「今年も『東京』其完成に努力する」（「時事新報」3日）、「芸術は文明から逃げる」（「時事新報」6〜7日）である。

⑩石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号・高1—237）

いろいろ有り難く存じました。

もう直ぐ出来る「ことと 左傍挿入」「不明二字 ミセケチ」存じます。校

正は御覧に入れたでせう。

小生は昨日帰りました。いづれそのうち。

十二月三日

葉書の宛先は「府下。板橋町中丸二八二／石井鶴三様」と記され、

差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣（印）」とある。本文および宛先はペン書きである。本文には「十二月三日」としか記されていないが、消印は時間が判読できないものの「白金／10・12・3／□□」とあるから、大正十年十二月三日に書かれたものである。

「小生は昨日帰りました」というので、上司小剣が森ヶ崎から自宅に帰ってきたのは、大正十年十二月三日の前日、すなわち十二月二日である。改めて礼を述べ、『東京 第一部 愛欲篇』がもうすぐ出来るだろうと知らせている。「校正は御覧に入れたでせう」とあるので、石井鶴三も挿絵や装幀の校正をしたことが窺える。『花道』の時には、出版社の不行き届きで、石井鶴三に校正が行かなかったため、先にも述べたように「画の入れ場所がめちやく／＼」になってしまったのである<sup>9</sup>。したがって、『東京 第一部 愛欲篇』については、石井鶴三に挿絵と装幀の校正を見てもらうようにと、上司小剣から大鏡閣に指示があったものと思われる。

上司小剣は最後に「いづれそのうち」としたためている。もちろん『東京 第一部 愛欲篇』の用事もあったのであろうが、大正十年頃には、上司小剣と石井鶴三は頻繁に互いの家を往き来していたのである。

⑪石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号・高1—236）

十二月十五日

拝呈『東京』の幀「飾 ミセケチ」装  
挿画とも非常に結構でござ

ざいましたね。只今拝見して、本文の

恥かしいのを感じて居ります。今後

ともよろしく願ひ「上げ 左傍挿入」ます。先は御礼まで。

愛慾の慾の字が「欲」になつてゐましたので、

「不明一字 ミセケチ」「一 左傍挿入」寸気になりました「不明一字 ミセケチ」が、調べてみたら欲でもよかつたようです。

この次ぎには統一しませうね。

葉書の宛先は「府下。板橋町中丸二八二／石井鶴三様」と記され、差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣（印）」とある。本文および宛先はペン書きである。本文には「十二月十五日」としか記されていないが、消印は地名、日や時間が判読できないものの「□□／10・12・□／□□―□」とあるから、大正十年十二月十五日に書かれたものである。

上司小剣は『東京第一部愛欲篇』が完成したので、石井鶴三に改めて挿絵と装幀の礼を述べている。

「愛慾の慾の字が「欲」になつてゐましたので、一寸気になりました」というのは、初版本では序、本文、奥付などが「愛慾篇」となっているのに、背表紙と扉の題字は「愛欲篇」になつていたからである。つまり、上司小剣は「慾」を用いているのだが、石井鶴三は「欲」を使ったのである。そのため、一冊の本に「愛慾篇」と「愛欲篇」が混在することになった。上司小剣が「この次ぎには統一しませうね」と述べたように、『東京第一部愛欲篇』は再版時に背表紙と扉の題字も「愛慾篇」に改められている。

#### 四

今回紹介した信州大学所蔵石井鶴三宛上司小剣書簡十一通は、『東京第一部愛欲篇』制作の行程を明らかにする上で、貴重な資料である。日本近代文学館には上司小剣の御遺族が寄贈された資料が「上司小剣コレクション」として所蔵されていて、その中に上司小剣宛石井鶴三書簡が十通ある<sup>⑩</sup>。その内容は上司小剣の『東京』四部作の挿絵や装幀に関するものであるが、今回紹介した、例えば石井鶴三宛上司小剣書簡①の「お返事を下さいますやうお願ひします」に対する石井鶴三の返信や、⑥の「お葉がき有り難く」にあたる葉書はない。石井鶴三が上司小剣に宛てた手紙の内容は上司小剣の書簡から推測するしかないのだが、信州大学所蔵石井鶴三宛上司小剣書簡から『東京第一部愛欲篇』に関する十一通を時系列に並べると、本文の校正、挿絵や装幀の制作などその本作りの進捗状況が窺える。

また、『東京第一部愛欲篇』については、著者である上司小剣が出版社と装幀家の連絡を仲介し、積極的に両者に働きかけていた。『花道』でのトラブルを経験し、それを教訓にして、ごたごたを回避しようと尽力したのだろう。『東京第一部愛欲篇』については、何度も石井鶴三に会って打ち合わせをしているし、問い合わせの手紙を出している。それほど『東京』四部作は、上司小剣にとって重要な作品であった。上司小剣は石井鶴三に出会って初めて挿絵の重要性に気づいたくらいだから<sup>⑪</sup>、かつては装幀に凝る作家ではなかった。『花道』『東京第一部愛欲篇』の本作りを通して、上司小剣に装幀の価値を教えたのも石井鶴三だったのだろう。

## 注

- (1) 発行日は奥付の記載に従った。
- (2) 拙稿「上司小剣『森の家』『花道』の挿絵と装幀に関して——石井鶴三宛上司小剣書簡から——」（信州大学附属図書館研究）第1号、平成24年3月31日）、「上司小剣『東京』〈愛欲篇〉の新聞連載の事情——信州大学所蔵石井鶴三関連資料から——」（信州大学附属図書館研究）第2号、平成25年1月31日）参照。
- (3) 大正八年五月八日付「時事新報」の「文芸消息」欄に「長谷川巳之吉氏玄文社経理部を司る。後任出版部長は三井玉輝氏」とある。
- (4) 大正十一年十月十九日付「時事新報」の「文芸消息」欄に「長谷川巳之吉氏は玄文社を退く」とある。長谷川巳之吉は、玄文社を辞めた後、大正十二年に第一書房を創業した。
- (5) 久世勇三について、宇野浩二が『文学の青春期』（昭和61年12月1日発行、沖積舎）の中で、小林政治（天眠）の次のような言葉を紹介している。  
この天佑社と相前後して東京で旗揚げしたものに、久世君（註、私の中学同級で、当時、『改造』、『中央公論』とならび称せられた、『解放』を出した）の大鑑閣と、金尾君の文淵堂がありますが、当時東京に於ける此の三つの新興出版業者が、偶然にも、期せずして、いづれも大阪出身者であつた事は不思議であつたと思ひます。  
久世勇三は大阪の出身で、宇野浩二や鍋井克之らと交流し、明治四十五年三月から大正元年八月まで、雑誌「短檠」（全6冊）を発行した。明石利代は『関西文壇の形成——明治・大正期の歌誌を中心に——』（昭和50年9月20日発行、前田書店出版部）の中で、「短檠」が「東区内久宝寺町二丁目の久世勇三のもとに設けられた大阪短檠社からの発行であることからは、久世勇三が経済上の責任を負うと知られる」と指摘している。「短檠」には、久世勇三も「久世青楓」という号で絵や詩を載せている。大阪で雑誌を発行していた久世勇三は、「短檠」の廃刊前後に東京に行き、大鑑閣を興したのだと思われる。  
なお、久世勇三編『新錦絵帳二の巻イソツブ噺譚』（大正9年12月10日発行、大鑑閣）に掲載された『新錦絵帳八の巻未定』の刊行予告には、その著者として石井鶴三と宇野浩二の名が記されている。石井鶴三が久世勇三の知り合いだったのか、宇野浩二が石井鶴三を指名したのかは定かではない。しかし、石井鶴三は『東京 第一部 愛欲篇』の挿絵と装幀を手がける以前から大鑑閣と関係があつたことが窺える。なお、『新錦絵帳八の巻未定』は遂に刊行されなかつたようだ。
- (6) 面家莊信については、『日本出版大観』（昭和5年10月31日発行、出版タイムス社）に、「明治十三年四月二日生」、現住所が「府下原宿町一〇九」とあり、次のように記されている。  
君は福井県の出身である。大正十一年赤阪区青山南町に株式会社而立社を創立して専務取締役に就任した（中略）君は経済学に対して造詣が深く、又書史学の研究者である。
- (7) 雑誌「解放」は、大正八年六月に創刊し、大正十二年九月に第五巻九号で終刊した。月一回発行で、全五十二冊である。発行所は大鑑閣（東京市京橋区桶町十五番地）、発行人は田中孝治であつた。大正九年五月、麻生久、佐野学、岡上守道、山名義鶴が解放社を立ち上げて「解放」の編集にあたり、大鑑閣は営業や広告などを担当した。大正十年五月、解放社は事務所を大鑑閣から切り離し、京橋区南鞘町二十五番地に移転した。
- (8) 大鑑閣について、竹盛天雄は『「解放」』（『文学』第25巻10号、昭和32年10月10日）の中で、「大鑑閣はマルクス全集、レッド・カバア叢書などの刊行物があり、大正デモクラシー運動に貢献した」と述べている。
- (9) (2)に同じ。
- (10) 拙稿「上司小剣『東京』（四部作）の成立過程——上司小剣宛石井鶴三書簡の紹介——」（『日本近代文学館紀要資料探索』第7号、平成24年3月発行）参照。
- (11) 上司小剣「挿絵画家は作家の女房」（『読売新聞』大正10年3月13日発行）

## 参考文献

- 日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典 第5巻』（昭和52年11月18日発行、講談社）
- 林達夫・福田清人・布川角左衛門編著『第一書房 長谷川巳之吉』（昭和59年9月14日発行、日本エディターズスクール出版部）
- 小田切進編著『増補改訂現代日本文芸総覧補巻』（平成4年12月18日発行、明治文献資料刊行会）
- 長谷川郁夫『美酒と革囊第一書房・長谷川巳之吉』（平成18年8月30日発行、河出書房新社）
- 小田光雄『古本探求Ⅰ』（平成21年2月20日発行、論創社）
- 小田光雄『古本探求Ⅲ』（平成22年1月20日発行、論創社）